ASEAN の近況、2023 年は飛躍の年となるか？

アジア経済交流センター長　鎌田　慶昭

新型コロナ感染拡大が始まって３年、ロシアのウクライナ侵攻が始まって１年が経過する。どちらもなかなか出口が見えないが、新型コロナの方はウィズ・コロナへの道筋が少しずつ見え始めて来たようである。今年の干支「癸卯（みずのとう）」は、寒気が緩み萌芽を促すといった意味があり、これまでの忍耐・努力が結実し、新たな成長・飛躍へとつながって行くことが期待できるという。ASEAN の国々は以前からウィズ・コロナへの取り組みを始めており、昨年は私も２年半ぶりに渡航し、脱コロナに向けて動き始めている ASEAN の息吹を体感することが出来た。

ASEAN の近況と共に、昨年実施した渡航での出来事、感想などをお伝えしようと思う。

A.　ASEAN の近況

１．日本 ASEAN 友好協力 50 周年

日本と ASEAN は、今年友好協力 50 周年を迎え、様々な記念行事が計画されている。

下の図は、昨年８月に議長国であるカンボジアのプノンペンで開催された「日･ASEAN 外相会議」で発表されたロゴマークであり、ASEAN 10 ヶ国を 10 本の稲の束によるリボンに見立て、それらが日の丸を包み込んでいるものだという。

２．インドネシアにて G20 開催

昨年 11 月 15 － 16 日にインドネシアのバリ島で開催された G20 には、G20 メンバーに加え、ウクライナを含む招待国 10 ヶ国、及び国際機関が参加した。

ロシアはプーチン大統領の代理としてセルゲイ・ラブロフ外相が出席、また、ウクライナのゼレンスキー大統領は 15 日にビデオ演説にてロシアの戦争制止の必要性、可能性を訴えた。

会議は①食料･エネルギー安全保障、②国際保健、③デジタル・トランスフォーメーションの３セッションに分けて実施され、困難が予想された首脳宣言の採択を実現させ、G20 開催国としての責務を果たした。

３．ベトナム フック国家主席突然の辞任

１月 17 日、ベトナムのグエン・スアン・フック国家主席が任期（2026 年迄）を残して辞任する意向を示し、翌 18 日に召集された臨時国会で解任が可決された。

国家主席は憲法上の国家元首であり、共産党書記長に次ぐ序列２番目に位置しており、任期中の辞任は異例のことであるが、同時に、ベトナム共産党の政治局員、中央委員、及び国防安全保障評議会議長の職も辞任した

同氏の在任中、新型コロナ流行などに絡む不正疑惑が発覚し、首相時代のフック氏を支えた前副首相２名が今月初めに解任され、また昨年６月に、新型コロナ対策を進めてきた前保健相が逮捕されており、国営ベトナム通信は、フック氏は指導者としての責任を取ったと伝えている。

これによりボー・ティ・アイン・スアン国家副主席が主席代行に任命されることが発表された。

4．タイ、中国人観光客への期待の高まり

コロナ禍により旅行業界が大打撃を受けているタイでは、ゼロ・コロナ政策緩和後に海外旅行が解禁となった中国からの旅行者への期待が高まっている。

1月9日、解禁後初となる中国からの直行便が観光客約300人を乗せてバンコク近郊のスワンナプーム国際空港に到着すると、到着ロビーではアヌティン副首相兼保健相を始めサックサヤーム運輸相、ピパット観光・スポーツ相らの政府要人が、横断幕と共に彼等を出迎える姿がTVに映し出され、横断幕には中国語で「タイと中国はひとつの家族」と書かれてあったという。（「タイはずっと親日だから」と言って油断していられないですね！）

5．ミャンマーから日本への入国者が増加

非常事態宣言の最終日である1月31日、更に6カ月の延長が決定し、民主化への道が遠のいた感のあるミャンマーであるが、欧米による経済制裁やウクライナ問題による物価高騰、外国企業の撤退による失業者の増大などで、国内は非常に厳しい状況におかれている。

かかる状況化、日本の水際対策が緩和された昨年3月以降、同国からの新規入国者が昨年末時点で21,370人となり、その多くが外国人技能実習制度を利用している模様。

ベトナムの経済発展や円安により、最近ベトナムからの実習希望者が減少傾向にある為、ミャンマーからの実習生を受け入れる日本の企業や高齢者介護施設は増えており、また、ヤンゴンでは日本語学校が急増し、現在300校以上あるという。

6．カンボジア シアヌークビル情報

今年、日本との外交関係樹立70周年を迎えるカンボジアは、インドネシア（65周年）やベトナム（50周年）よりも長い外交の歴史を持ち、近年はタイ、中国、或いはベトナム・プラスワンの進出候補先として注目を集めている。

進出候補地の一つが、カンボジア南西のプレア・シアヌーク州の州都シアヌークビルである。当地は人口15万人ほどの港町であり、2017年から中国により急速に開発が進められた。

リゾート地として多くのカジノホテルが乱立し、一時期は中国人投資家や観光客で大いに賑わったが、2019年のオンライン・カジノの禁止や、その後のコロナ禍により、カジノ・リゾートとしての活況が失われた。

しかし、ここには1999年から日本政府が永年に亘り支援を続け「ジャパン・ポート」と呼ばれるカンボジア唯一の深海商業港（日本の上組が株式13%保有）があり、日本が官民で足場を築いた重要な海の玄関口となっている。更に日本政府は同港コンテナターミナル拡張の為、昨年8月に約414億円を上限とする円借款貸付契約を締結した。

日本が支援するシアヌークビル港

隣接地には、日本の円借款で整備され2012年に開業したシアヌークビル港経済特区があり、日本の企業も入居している。また、首都プノンペンを中心にモール3店舗を展開するイオンは、同特区内でロジスティック事業を開始することを昨年1月に発表した。

当地は観光省が注力するグリーン・エコツーリズムの目的地としても期待されており、州内では森林滝公園リゾート開発が計画されている。

シアヌークビル港湾公社に長年勤務している知人によると、そこに日本式リゾートホテルを誘致する計画もあり、日本の特徴を出した良質な日系観光企業の進出を期待しているという。

シアヌークビル郊外の森林リゾート開発地

B. ASEAN 渡航報告

1．シンガポール（2022 年 9 月）

アジア経済交流センターでは、昨年 9 月 1 ～ 30 日、シンガポールのショッピングモール内にて「富山県産品プロモーション事業」を実施し、その期間中に経済ミッション団を派遣した。

筆者も団の一員として、プロモーションの現場、並びに日本食スーパー、百貨店等小売の現場を見学させて頂き、JETRO（日本貿易振興機構）、CLAIR（自治体国際化協会）他、現地駐在の方々より生きた情報をご提供頂いた。

シンガポールをプロモーションの場所として選んだのは、人口は少ないが富裕層が多いこと（月収 120 万円以上の富裕層が全体の 34% 以上）に加え、同国の持つ ASEAN への情報発信力、物流ハブ機能を期待したものである。

県産品プロモーションの現場

- 同プロモーションでは、冷凍釜揚げほたるいかが大人気で、開始後僅か 4 日で完売だった。氷見うどんも細麺は完売、極細麺も残り僅か。また、野菜だし入り味噌も完売だった。
- 麺家いろはのハラルラーメンは、ブラック醤油、エビ塩味は共に完売、ビーガンのカレー味もあと一息というところだった。（2 食入りブラック、エビ塩味が共に S$8, ビーガンカレーが S$9）因みにローカルのインスタント麺は一食 S$1 程度である。（注：S$1 は約￥100）
  尚、今回は生麺の展示だったが、現地情報では、シンガポール人は生麺へのこだわりがさほど無く、むしろカップ麺等の普及により乾麺への愛着が強く、しかも賞味期間が乾麺の方が生麺の２倍以上長いことから、今後は乾麺での展開も要検討のようだ。
- 前月に室内でのマスク着用義務が解除されたが、モール内はまだマスクをしている人が大半だった。しかし街中を歩く人達は殆どマスクをしておらず、日本では味わえない解放感を感じた。
- 円安とインフレのダブルパンチで、各売り場で目にする価格はどれも高く感じられた。昼食時にコンビニで購入した冷やしたぬき（不味かった！）が約 800 円だった。
- 当時、アジア最大の Web3 イベント TOKEN2049 Singapore が開催され、週末には F1 グランプリを控え、中心部の主要ホテルはほぼ満室状態で、モールもホテルのロビーも多くの人達で賑わっていた。人口の少ないシンガポールが、MICE 誘致等により経済活性化に注力している現状が実感できた。

IROHA Mart にて

清酒 立山 720ml S$107.50

- ASEAN で長年日本企業の販路開拓をサポートしている日本アシストシンガポールの関社長は、大切なのは「差異と理解」であり、差別化を理解させることが重要とのこと。差別化だけでなく、優位性を認識させなければ意味が無い。

2．インドネシア　ジャカルタ・ジャパン祭り参加（個人旅行、2022 年 10 月）

「ジャカルタ・ジャパン祭り（JJM）で劇団 en 塾と一緒に歌いませんか？」と言う、同劇団を主宰する甲斐切先生（Jakarta Communication Club 代表）からのお誘いで、即座に渡航を決めた。

「劇団 en 塾」はインドネシア人大学生達による日本語ミュージカル劇団であり、2009 年に結成され、12 年間の活動の後、2021 年に惜しまれながら解散した。ここでは学生達に規律や礼儀等を学習させる教育の場でもあり、卒業生の多くは日系企業や大使館のスタッフとして活躍している。

同劇団は、年 1 回の劇場公演の他、各種イベントに参加、また、2015 年からは毎年日本公演を行っていたが、その集大成となる筈だった 2020 年の東日本公演（仙台･東京）が、コロナ禍で中止となってしまい、彼等との日本での再会が叶わなかった。

ジャカルタ駐在時この劇団を応援し、帰任後も彼等との交友関係を続けてきた筆者は、3 年ぶりに家族に出会うような気持ちで、10 月 13 日ジャカルタに飛んだ。

- インドネシアでは観光目的でも到着ビザの取得が義務付けられており、50 万ルピア（約￥4,400）を支払って空港でビザを取得、入国手続き、税関は事前の Web 申告もあり、非常にスムーズだった。
- 建物の中はもとより、街中、バス・鉄道の車内でも殆どの人達がマスクをしていた。ウレタンマスクをした筆者が MRT(地下鉄) の駅に入ろうとしたところ、係員からマスクを二重にするように注意を受け、手持ちの不織布マスクを重ねて入場が許可された。ショッピングモールに入る際は、ワクチン接種証明をアプリ（Peduli Lindungi）か、ハードコピーで示す必要があった。
- 翌 14 日は以前の職場 JETRO ジャカルタ事務所を訪問し、現地スタッフ達と旧交を温め、午後から知人が経営する LPK（技能実習生送り出し機関）Kokorono Siji を訪問し、生徒達による歌合戦に審査員として参加、夜は劇団 en 塾の稽古場にてリハーサルに参加、という多忙な 1 日だった。
- 3 年ぶりの開催となる JJM は、以前のような野外ではなく、ジャカルタ市内の FX スディルマンというショッピングモール内で開催された。1 階では和太鼓が鳴り響き、2 階は日系企業等のブースが並び、3 階はステージと、その横に日本食の屋台が並び、7 階の JKT 劇場では、JKT48 や歌手の加藤ひろあき、地元で人気のハニン・ディヤ等によるライブ・パフォーマンスが繰り広げられた。新聞報道によると、3 日間の延べ入場者数 9 万人、オンライン配信の視聴者が 5 万人だったという。混雑がピークとなる夕方、一時は入場制限がかけられ、入口前に長蛇の列が出来たこともあった。

2 階の企業ブース

- 開催 2 日目の午後、オーバーワークとなった下りエスカレーターが突然暴走し、パニックになった。暴走し始めた下りエスカレーターに乗っていた筆者は、降りた地点で呆然と立ちすくんでいた人達に「Maju maju!（進んで進んで！）」と後ろから叫び、自らも着地（降下スピードが速くこの表現がピッタリ）してすぐ左に避け、ドミノ倒しのリスクを回避した。直後にそのエレベーターは停止した。モールは想定を遥かに超える入場者でふくらんでおり、いつ崩れるか？という恐怖感が常にあった。
- 劇団 en 塾が出演する 4 プログラムのうちの一つが、日本人サポーター達とのコラボステージで、

彼等の代表曲を２曲一緒に歌わせてもらい、彼等との旧交を温めることが出来た。

３．ベトナム（2022 年 12 月）

新田知事を団長として、県内企業 20 社が参加した「富山県ベトナム経済訪問団」の一員として、ベトナムのハノイ、ホーチミン、及びその近郊を訪問した。

MOU に署名した新田知事とゴック投資計画省副大臣

- 富山県は、ベトナム投資計画省と 2016 年に MOU（包括連携協定）を締結済みだが、今回はその強化版を締結して同省内に富山デスクを設置し、両者間の経済交流を更に強化することが主目的だった。ベトナムは、海外展開を希望する県内企業の中で、最も人気が高く、関心の高い国である。
- JETRO ハノイ事務所、在ベトナム日本大使館などで現地の情報をお聞きした他、現地に進出済みの県内企業を訪問し、その活動ぶりを拝見した。
- ハノイの旧市街に店を構える「麺家いろは」も訪問先の１社であり、富山ブラックのラーメンを皆で試食させて頂いた。開店して５年間、当初から利益を出していたが、今年が賃貸契約最終年であり、閉店される予定だったが、今回の訪問団来訪に合わせて閉店の時期をずらし、特別に営業した（注：その後、継続が正式決定！）

　ベトナム人に合わせた薄味と、濃い目の元味の２種類が用意された。食材は全て現地調達ということだが、元味の方は日本の味と殆ど変わりが無かった。

ハノイ旧市街の「麺家いろは」にて

- ハノイの統一公園では、早朝からベトナムの人々のテンションは高く、ジョギング、ウォーキングの他、大音響で音楽を鳴らしながらのワークアウト、ダンスを楽しむグループがあちこちで体を活発に動かしていた。ガラクタ市などの店も開店していた。

・ハノイ市内は、比較的昔の面影を残していたが、周辺地域の開発や工業団地の建設は目覚ましく、工場進出に際し選択肢が大幅に増えた。ハノイ近郊のフンイエン省、ハナム省はもとより、中部ベトナムに属するゲアン省、タインホア省まで開発が進むなど、首都圏と地方を結ぶ道路の整備が、ハノイの経済圏を広げている。

・ホーチミン市内の変貌は目を見張るものがある。高層ビルやマンション、モール、コンビニ等が激増し、中心地及びその周辺は開発されつくした感がある。小売り・飲食などの分野でベトナム進出を検討する場合は、競争が過熱気味の都心部より伸びしろの大きい地方都市を狙うべきであろう。製造業も、土地代が高く人材確保の困難な都市近郊ばかりでなく、地方の工業団地まで選択の範囲を広げる方が良さそうだ。

セブンイレブン、ファミリーマート、サークルＫの「コンビニそろい踏み」

４．所感

・ベトナムの親日は知られているが、彼等は同時に台湾、韓国、そして中国とも是々非々で親密な関係を保とうとしている。ベトナムの親日に胡坐をかくことなく、彼等のしたたかな部分も良く見極め、日本は今や選ばれる立場にあるのだ、ということを自覚すべきである。
これはベトナムに限ったことではなく、多くのASEAN 諸国に当てはまることである。

・ホーチミンで経営塾を主宰するあるベトナム人事業家は、「日本人は失敗に対し寛容さが足りない。もっと失敗を恐れずチャレンジすべき」だと言う。「先ずベトナムでテストして、結果が良ければそのスキームを世界で展開すれば？」とも。

・筆者も常々感じてきたことであるが、日本企業の慎重さ、注意深さは相手国から見れば決断力、スピードの欠如、本気度の欠如と捉えられかねない。
しかし、コンプライアンス意識が希薄な国々とスピードで対抗するのは至難の業である。
決定は遅いが失敗の確率は低い、上手く行かなくても安易に逃げないという日本の長所を理解して貰い（これも一種の「差異と理解」だ。）、親日と共に、**信日**を失わない努力が必要となろう。

・綿密な調査・準備も必要だが、①まず一歩踏み出す勇気、②想定外のことが起きても対応できる柔軟さ、③正確な情報や的確な助言を得るための現地ネットワーク構築（現地の友達作り）が必要となる。
現地での生きた情報の取得や、ネットワークの構築は、自身が実際に事業を進めながら得られる場合が多く、それらの情報はウェブ等で得るものより確度・鮮度の点で遥かに高い。

とまれ、早くからウィズ・コロナ・モードに切り替わっている ASEAN は既に走り始めている。

海外展開を志向するなら「コロナが収まったら」という台詞は、もはやタブーだと言えそうである。

以上